

2022.8.8

**TOYOBO**  
Beyond Horizons

# 2022年度 第1四半期 決算説明

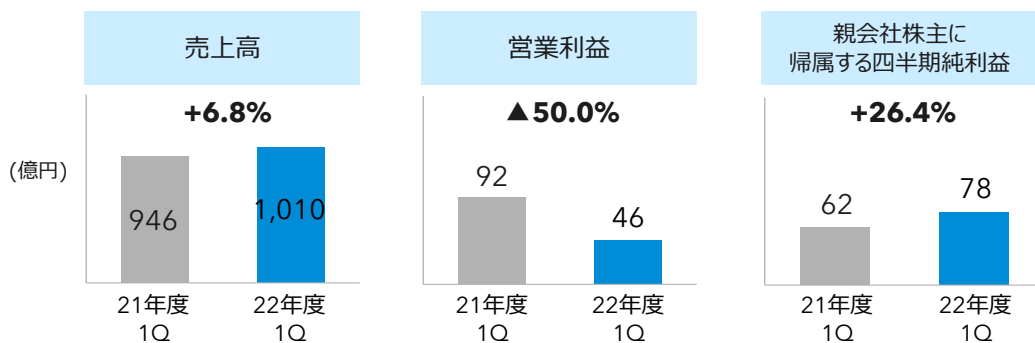
東洋紡株式会社

皆さん、こんにちは。大槻でございます。本日は、決算説明会にご参加いただきまして、ありがとうございます。順番に説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

## 第1四半期実績

フィルムは販売を伸ばすも、原燃料価格高騰の影響を受け、増収減益。

営業利益 46 億円 (50.0%減) も、四半期純利益は、特益により 78 億円 (26.4%増)



## 2023年3月期通期予想

フィルムの増産効果、PCR検査需要増を見込むも、原燃料価格の高止まり、自動車減産の長期化の影響を踏まえ、営業利益 240 億円、当期利益 130 億円の予想を据え置く

まず、決算のポイントでございます。

売上高は21年度1Qの946億円から1,010億円となり、約64億円、6.8%の増収でございました。フィルム事業が販売を伸ばしたことに加え、原燃料価格の売値への転嫁の努力、コロナから回復してきている素材の貢献があり、1,010億円は、1Qとしては07年の1,017億円以来15年ぶりの規模となりました。

なお、21年度の4月に、帝人から譲り受けましたフィルム関係の子会社を東洋紡本体と合併しております。12月決算の会社でございましたので、1月から3月までの最後の3カ月間の売上高約68億円を、21年度1Qの決算に合算いたしました。この合算により、売上高が増えましたため、本来の21年度1Qの売上高は約68億円分低いわけでございます。したがって、68億円を足して計算していただきますと、増収幅は約132億円、増収率は約15%となります。

営業利益は46億円となり、21年1Q対比で減益率50%でございました。こちら先ほど申し上げたとおり、帝人から譲り受けた子会社の合併要因約11億円が、21年1Qの92億円に含まれております。差し引いていただきますと、

減益幅は約35億円、減益率は43%になります。

価格転嫁を一所懸命、進めておりますが、21年度1Qの営業利益92億円は、原価算入ベースではまだ低い原価であったのに対し、22年度1Qは残念ながら原価が上昇してきており、しんどい状況でございました。

ただ、21年度1Qの92億円はやや出来過ぎであって、20年度、19年度と追っただきますと、概ね1Qは40億円から50億円を推移してきておりますので、通期計画からの比較といたしましても、予定線上にあると認識しております。

また、当期純利益は、78億円でございました。特別利益を計上した影響により、1Qといたしましては、四半期連結決算を開示し始めました03年辺りからの記録によれば、過去最高益となりました。

2023年度3月期の通期予想に関しましては、包装用フィルムの新しい設備が立ち上がってくることによる増産効果に加えて、PCR検査需要が、第7波の感染拡大の影響により、当初の見込みほどは落ち込んでおらず、プラス要因となると見ております。

一方、原燃料価格の影響につきましては、目先は少し原油価格が下がっておりますので、少し影響額が小さくなるかとは思いますが、価格転嫁に苦しんでおり、大きな不透明要因でございます。自動車関連も、半導体不足の影響により、年度後半辺りまで減産が続くと見ております。そういった不透明要因を踏まえまして、この5月に発表させていただきました営業利益240億円を、据え置かせていただきました。

当期純利益につきましても130億円で据え置きとさせていただきました。

(億円)

	21年度 1Q	22年度 1Q	増減	
			金額	率
売上高	946	<b>1,010</b>	+64	+6.8%
営業利益	92	<b>46</b>	▲ 46	▲ 50.0%
(率)	9.8%	<b>4.6%</b>	-	-
経常利益	75	<b>43</b>	▲ 31	▲ 42.0%
特別損益	▲ 5	<b>65</b>	-	-
親会社株主に帰属する四半期純利益	62	<b>78</b>	+16	+26.4%
EBITDA* <small>* 営業利益 + 減価償却費 (のれんを含む)</small>	143	<b>95</b>	▲ 48	▲ 33.7%
EPS (円)	69.5	<b>87.7</b>	-	-
減価償却費	50	<b>48</b>	▲ 2	▲ 3.6%
設備投資	73	<b>90</b>	+17	+23.5%

■特別利益：うち、火災事故の受取保険金 56 億円

3

決算のサマリーでございますが、改めまして、売上高、営業利益は記載のとおりでございます。

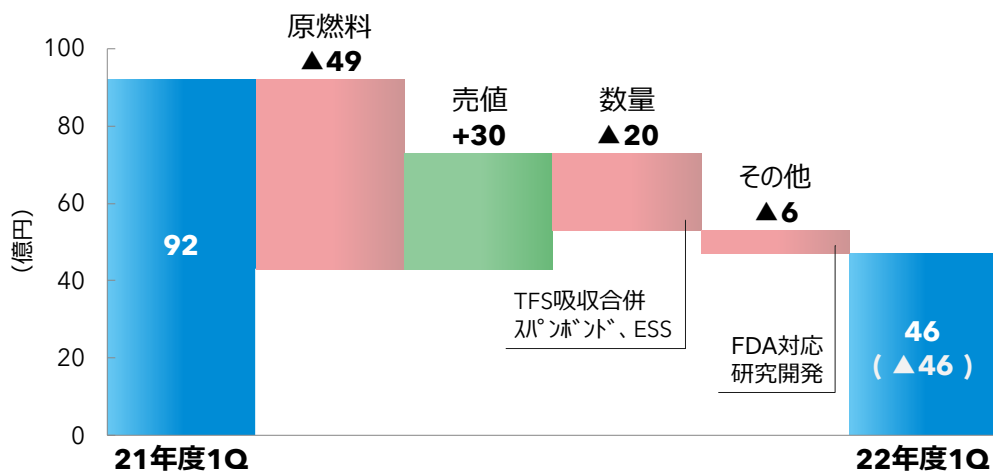
経常利益は43億円となり、特別損益に65億円を計上いたしました。5月の決算発表のときに、犬山工場の火災に対する受取保険金の確定を開示しておりますが、その保険金は当年度の利益見通しに織り込み済みでございまして、予定通りに入ってきたということでございます。

また固定資産売却益なども発生いたしましたので、合わせて65億円という特別損益となりました。

結果として、当期純利益が78億円でございました。

設備投資額は、90億円でございました。21年度1Qは73億円ですので、先行投資をやりますと中計でも発表させていただいておりますけれども、既に大型の投資が順番に進んできており、そこそこの金額になってきております。

# 営業利益の増減要因



	21年度1Q	22年度1Q
為替レート (円/US\$)	110	130
国産ナフサ (千円/kl)	48	86

営業利益の増減要因でございます。

原燃料因は49億円でありまして、一所懸命、売値への転嫁努力を続けてまいりましたが、22年度1Qの売値因は30億円にとどまり、単純に割り返していただきますと転嫁率は約6割でございました。

断続的に原燃料価格が上がり、なかなか売値転嫁が追いつきませんでした。包装用フィルムでは価格転嫁の表明と交渉を進めておりますが、実際の売値に効いてくるのは2Q以降でございます。

工業用フィルムも異例の値上げを春先に表明し、交渉しておりますが、苦戦しております。こちらも、2Q以降は少しずつ寄与していくと見込んでおります。

そのほかの素材につきましても、一所懸命値上げをしております。

数量因はマイナス20億円でございました。こちらは、帝人から事業譲渡を受けました東洋紡フィルムソリューションの吸収合併が、21年度1Qに11億円含まれておりました分を、減益要因としてカウントしております。

そのほか、スパンボンド、ESSは、販売数量を落としました。

医薬品製造受託は、FDAのWarning Letterへの対応で費用を使っております。前向きな費用としては研究開発費も増えてきており、合計してその他因が6億円と分析させていただきました。

## 決算サマリー | BS

TOYOBO

	(B)		(A)	(億円)
	21/3末	22/3末	22/6末	増減(A)-(B)
総資産	4,912	5,178	<b>5,336</b>	+158
現預金	347	272	<b>325</b>	+53
棚卸資産	763	960	<b>1,038</b>	+77
有形固定資産	2,246	2,276	<b>2,321</b>	+45
純資産	1,886	1,971	<b>2,044</b>	+73
自己資本	1,857	1,949	<b>2,021</b>	+72
うち利益剰余金	644	747	<b>789</b>	+42
非支配株主持分	29	23	<b>23</b>	+1
有利子負債	1,870	1,912	<b>1,987</b>	+75
D/E レシオ	1.01	0.98	<b>0.98</b>	-
Net Debt / EBITDA倍率*	3.3	3.4	<b>4.4</b>	-

\* (有利子負債 - 現預金) <期末> / EBITDA <年換算>

5

BSでございます。現預金と棚卸資産が若干増えております。包装用フィルムなどは、今は在庫が払底しておりまして、一所懸命つくり、ためて、さばいてという状況でございます。

純資産といたしましては、自己資本が72億円増加いたしました。1Qの利益剰余金は、配当金などもございましたが、利益が上がりましたので42億円増えてございます。

また、円安が進みましてので、昔のドル建てのレートで投資しております海外子会社に対する為替換算調整勘定が、円価格で見ますと当時の投資簿価に近づいて、減少幅が縮小したため、約30億円の増加要因となりました。

結果といたしまして、設備投資で借入金が増えましたけれども、自己資本も増えましたので、D/Eレシオは22年3月末から横ばいでした。

## 決算サマリー | セグメント別

TOYOBO

(億円)

	売上高		営業利益		
	21年度 1Q	22年度 1Q	21年度 1Q	22年度 1Q	増減
フィルム・機能マテリアル	457	<b>453</b>	68	<b>35</b>	▲ 33
モビリティ	111	<b>118</b>	▲ 5	<b>▲ 8</b>	▲ 3
生活・環境	277	<b>321</b>	15	<b>3</b>	▲ 12
ライフサイエンス	75	<b>87</b>	19	<b>21</b>	+3
不動産・その他	26	<b>31</b>	4	<b>3</b>	▲ 0
消去・全社	-	-	▲ 8	<b>▲ 9</b>	▲ 1
合計	946	<b>1,010</b>	92	<b>46</b>	▲ 46

6

セグメント別の数字でございます。

フィルム・機能マテリアルは457億円から453億円へ減収でございました。68億円が21年度1Qに含まれておりますため、実質は64億円の増収でございました。

モビリティ、生活・環境、ライフサイエンス、その他は、全て増収でございました。

営業利益につきましては、フィルム・機能マテリアルは68億円から35億円となり、子会社の合併要因11億円を差し引かしても、約22億円の減益でございました。

モビリティも苦戦しており、営業赤字が広がりました。生活・環境も残念ながら12億円減益でございました。

ライフサイエンスはPCR関連を中心に想定よりも健闘し、3億円の増益でございました。



	21年度	22年度	増減	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	457	453	▲ 4	▲0.9%
営業利益	68	35	▲ 33	▲48.3%
(率)	14.9%	7.8%	-	-

(億円)

**包装用フィルム**

- 出荷堅調も、原料高に対し製品価格の改定にタイムラグあり。2Q以降スプレッド改善へ

**工業用フィルム**

- 液晶偏光子保護フィルムは、新ライン（3号機）の生産性を高め、約15%増収。  
ただし、原料高の影響を受ける

**機能材料**

- 工業用接着剤“バイロン”は、中国のゼロコロナ政策（ロックダウン）の影響を受ける

それでは次に各セグメントについて、簡単に説明申し上げます。

まずフィルム・機能材料でございますが、包装用フィルムは数量が堅調でございますが、原料高に対する製品売値の価格改定がまだ追いついてきておらず、1Qはしんどい決算でございました。2Q以降に、スプレッドの改善を見込んでおります。

工業用フィルムの液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”は、新ラインの立ち上がりは順調であり、生産性が徐々に高まってきておりますため、今期は15%の増収となりました。しかし、残念ながら原料高の影響を受けました。

“バイロン”なども1Q後半から中国のゼロコロナ政策の影響が徐々に出てきており、苦戦いたしました。

	21年度	22年度	増減 (億円)	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	111	118	+7	+6.8%
営業利益	▲ 5	▲ 8	▲ 3	-
(率)	-	-	-	-

**エンジニアリングプラスチック**

- 国内・海外ともに、自動車減産に加えて、原料高の影響を受け、苦戦

**エアバッグ用基布**

- 原料高により悪化したスプレッドの改善が遅れる

モビリティでございます。

まずエンプラは、自動車の減産による影響に、原料高が加わり、非常に厳しく、損益を落としました。

エアバッグ用基布も、原料高が非常に先行しておりまして、なかなか売値が追いつかず、スプレッドの改善が遅れております。ただ、営業赤字ですが、営業損失は縮小いたしました。

	21年度	22年度	増減 (億円)	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	277	321	+44	+15.8%
営業利益	15	3	▲ 12	▲ 81.5%
(率)	5.4%	0.9%	-	-

### 環境ソリューション

- 世界的なEV化に伴うリチウムイオン電池（LIB）の需要拡大を受けて、LIBセパレーター工場向けの VOC処理装置、交換エレメントは、販売が回復

### 不織布マテリアル

- 長繊維不織布スパンボンドは、自動車減産、原料高の影響を受け、苦戦
- ポリエステル短繊維は、衛材用途の販売は堅調も、原料高の影響を受ける

### 高機能ファイバー

- “ザイロン”は、自転車タイヤ用途の販売が堅調

9

生活・環境は売上高を大きく伸ばしました。

まず、VOC処理装置が、リチウムイオン電池の需要拡大を受けまして、大きく伸びました。

また、水処理膜の事業におきまして、サウジアラビアの子会社での膜の交換需要がコロナから回復してきたことに加え、決算期の変更により、6カ月分を取り込みました。

高機能ファイバーも、“ザイロン”が、自転車タイヤ用途などで、堅調でございました。

さらに、21年度に売上高を落としておりました、紳士服の事業を行う子会社の御幸毛織が、百貨店などの需要の回復に伴って回復基調でございました。

営業利益は、リチウムイオン電池の需要拡大によりセパレーター向けのVOC処理装置が回復してきておりますが、不織布マテリアルにおいて自動車の減産、原料高の影響を受けましたため、全体といたしましては厳しく、減益でございました。

ポリエステル短繊維は、衛生材用品向けの数量は出ているのですけれども、

原料高の影響を受けて利益を落としました。

	21年度	22年度	増減 (億円)	
	1Q	1Q	金額	率
売上高	75	87	+12	+16.2%
営業利益	19	21	+3	+14.7%
(率)	24.9%	24.6%	-	-

## バイオ

- 新型コロナの感染拡大が落ち着き、PCR検査用試薬の販売は減少も、診断薬用原料酵素、遺伝子検査用試薬の原料酵素の販売が拡大

## メディカル

- 人工腎臓用中空糸膜、ウイルス除去膜の販売は堅調

## 医薬

- 医薬品製造受託は、FDA対応の費用、および稼働率低下により、苦戦

ライフサイエンスでございます。当初は、PCR検査需要が落ち込むとみておりましたが、第7波の拡大が続いております。21年度4Qのピークに比べると、22年度1QのPCR検査用試薬の販売は減少いたしました。当初の想定に比べますとかなり健闘しております。通期でも健闘すると予想しており、通期の営業利益予想を増益修正させていただきます。

メディカル関係につきましても、堅調に売上高を伸ばし、利益も堅調に推移いたしました。

医薬品製造受託につきましても、FDA対応の費用がかさんでおり、また、FDA対応にかかり切りになっている影響により稼働率が落ち、苦戦が続いております。

## 2022年度 業績見通し

TOYOBO

フィルムの増産効果、PCR検査需要増を見込むも、原燃料価格の高止まり、自動車減産の長期化の影響を踏まえ、営業利益 240 億円、当期利益 130 億円の予想を据え置く  
(億円)

	21年度	22年度	増減	
	実績	見通し	金額	率
売上高	3,757	<b>4,100</b>	+343	+9.1%
営業利益	284	<b>240</b>	▲ 44	▲ 15.6%
(率)	7.6%	<b>5.9%</b>	-	-
経常利益	231	<b>180</b>	▲ 51	▲ 22.1%
特別損益	▲ 83	<b>6</b>	-	-
親会社株主に帰属する当期純利益	129	<b>130</b>	+1	+1.0%
EBITDA	485	<b>450</b>	▲ 35	▲ 7.2%
EPS (円)	144.8	<b>146.3</b>	-	-
減価償却費	201	<b>210</b>	+9	+4.6%
設備投資	336	<b>380</b>	+44	+13.0%

11

通期の見通しでございます。フィルム事業では引き続き増産効果が出てくると見通しております。

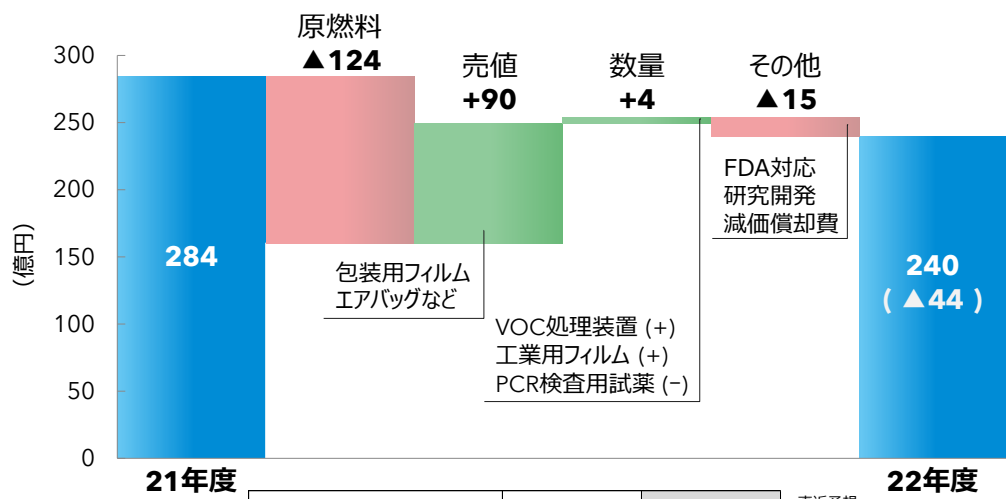
PCR検査需要は、5月の頃には、21年度の半分程度と見通しておりましたが、足元では第7波の影響により非常に堅調でございます。昨年度並みとはいきませんが、おそらく昨年度の7割程度の需要となるであろうという想定をしております。

フィルムやモビリティにおいては、原燃料価格の高止まりと自動車減産の影響があると見込まれますが、PCR関連を中心としてライフサイエンスが支えてくれるであろうと考え、通期見通しの営業利益240億円、当期純利益130億円の予想を据え置きとさせていただきます。

設備投資は380億円を計画しており、予定通りに大型投資が進んできております。

# 営業利益の増減要因

TOYOBO



	21年度	22年度	直近予想 (22/5)
為替レート (円/US\$)	112	132	125
国産ナフサ (千円/kl)	57	78	84

営業利益の増減要因でございます。原燃料因がマイナス124億円でございます。

5月時点ではマイナス140億円でしたが、目先、ややナフサ価格の水準が落ち着いてきましたので、縮小させていただきました。

売値因はプラス90億円とし、124億円の原燃料コスト高を吸収したいと思っております。5月時点ではプラス96億円と言っておりましたが、工業用フィルムなどを中心に、そこまではいかないという見通しでございます。単純に割り返していただきますと、124億円の原燃料を90億円取り戻すということで、転嫁率は73%になります。

モビリティのエアバッグ用基布などもなかなか厳しい状況が続いており、90億円でぎりぎりというのが今の見通しでございます。

数量因につきましては、PCR検査関連は、昨年度と比べると減益要因となるのですけれども、5月時点での通期見通しに比べると減益幅を小幅に見ております。一方で工業用フィルムがややしんどいため、数量因はプラス4億円とさせていただきます。

その他因マイナス15億円は、5月時点から変更しておりません。減価償却費が、主にフィルム関係の新設備の立上げなどで発生する見込みです。全体として、通期の営業利益240億円に対し、なんとか線上で推移させていけると見ております。



## セグメント別見通し

TOYOBO

(億円)

	売上高		営業利益			直近予想 (22/5)
	21年度 実績	22年度 見通し	21年度 実績	22年度 見通し	増減	
フィルム・機能マテリアル	1,703	<b>1,860</b>	199	<b>185</b>	▲14	190
モビリティ	447	<b>530</b>	▲18	<b>▲23</b>	▲5	▲16
生活・環境	1,143	<b>1,250</b>	35	<b>30</b>	▲5	30
ライフサイエンス	350	<b>350</b>	87	<b>67</b>	▲20	55
不動産・その他	114	<b>110</b>	22	<b>21</b>	▲1	21
消去・全社	-	-	▲40	<b>▲40</b>	+0	▲40
合計	3,757	<b>4,100</b>	284	<b>240</b>	▲44	240

13

セグメント別でございます。5月時点での営業利益予想に対し、フィルム・機能マテリアルは5億円下方に修正させていただき、185億円といたしました。

モビリティにつきましても16億円から約7億円下方に修正させていただき、23億円といたしました。

ライフサイエンスは、PCR検査用試薬などを中心に堅調に推移すると見込み、55億円から67億円に、12億円上方に修正させていただきました。

以上でございます。よろしくお願いいたします。

補足

# セグメント別情報

TOYOB0

(億円)

売上高	21 年度					22 年度
	1Q	2Q	3Q	4Q	通期	1Q
フィルム・機能マテリアル	457	402	414	430	1,703	453
モビリティ	111	105	106	126	447	118
生活・環境	277	270	277	319	1,143	321
ライフサイエンス	75	89	82	104	350	87
不動産・その他	26	27	28	33	114	31
消去・全社	-	-	-	-	-	-
合計	946	892	907	1,012	3,757	1,010

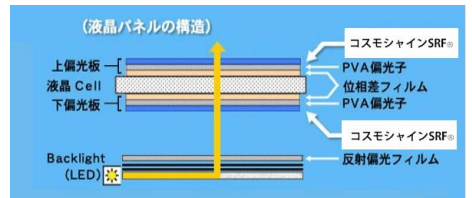
営業利益	21 年度					22 年度
	1Q	2Q	3Q	4Q	通期	1Q
フィルム・機能マテリアル	68	54	43	33	199	35
モビリティ	▲ 5	▲ 4	▲ 6	▲ 3	▲ 18	▲ 8
生活・環境	15	4	8	8	35	3
ライフサイエンス	19	28	18	23	87	21
不動産・その他	4	7	5	6	22	3
消去・全社	▲ 8	▲ 10	▲ 11	▲ 11	▲ 40	▲ 9
合計	92	79	58	55	284	46

## 液晶偏光子保護フィルム “コスモシャインSRF”

超複屈折ポリエステルフィルム

延伸フィルムでありながら、複屈折による着色（虹むら）を解消

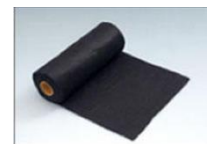
- 主な用途：液晶TVの偏光子保護フィルム
- 強み：
  - ・低吸湿性のため、ハンドリング性に優れる（優れた寸法安定性、低い反り性）  
⇒液晶TVの大型化、ベゼルレス化、パネルのオープンセル化に、強みを発揮
  - ・ポリエステル、熔融製膜のため、価格競争力がある
- 競合素材：TAC、アクリル（PMMA）※ポリエステルは、当社のみ
- 顧客：海外の偏光板メーカー
- 販売：2013年度から、販売開始  
2021年度は、2017年度比 約 3 倍の売上高に成長
- 増産対応：2号機（2017年度）、3号機（2020年度）
- シェア：約 50 %



### VOC処理装置

“Kフィルター”を内蔵した VOC回収装置（吸着回収式）など

“Kフィルター”とは、1974 年に当社が世界で初めて工業化に成功した、独自の活性炭素繊維



“Kフィルター”

- 用途：工場からの排気ガス・排水中の VOC処理（溶剤回収）
- 強み：吸脱着速度が速く、溶剤の熱分解を抑え、高効率・高品位の溶剤回収が可能  
特に、塩化メチレンなど塩素系溶剤の処理に優れる
- 顧客：LIBセパレーター(LIBS)、TACフィルム、印刷、化学、製薬、自動車、食品などのメーカー  
※国内外で1,300台以上の採用実績
- シェア：吸着回収式でトップ  
VOC処理装置市場のうち、吸着回収式 20～30%（主流は燃焼処理）
- 市場：世界的なEV化や再生可能エネルギーの普及により、LIB需要は急増
- 販売計画：2025 年度に、2021年度比 約 2 倍



VOC回収装置

### 新型コロナウイルス検出キット

- 強み：
  - ・高速増幅、コピーが正確、夾雑物に対して高耐性のPCR酵素使用
  - ・特殊酵素等により、検体（咽頭ぬぐい液、唾液）の不純物除去作業を省き、遺伝子抽出工程を短縮。最短 60 分以内で、新型コロナウイルスの検査が可能
- 顧客：民間センター、病院等
- シェア：約 15 %（当社推定値） 国内トップ 3



新型コロナウイルス検出キット

### 全自動遺伝子解析装置“GENECUBE”

- 強み：
  - ・試薬の混合から遺伝子の増幅・検出まで、最短約 30 分で検査が可能
  - ・診断薬～機器システムまで一貫開発。原料酵素も自社調達
  - ・最大 24 テスト、4 項目 同時測定可能
- 顧客：大手検査センター、主要病院等



診断薬



“GENECUBE”（モデルC）

- 遺伝子検査用の原料酵素、試薬、診断薬、診断装置まで展開  
感染症診断のソリューションビジネスの拡大へ

## 世界的な 4つの ESG 指数の構成銘柄に継続選定

- FTSE Blossom Japan Index
- FTSE Blossom Japan Sector Relative Index
- MSCI ジャパン ESG セレクト・リーダーズ指数
- MSCI 日本株女性活躍指数 (WIN)



FTSE Blossom  
Japan



FTSE Blossom  
Japan Sector  
Relative Index

2022 CONSTITUENT MSCI ジャパン  
ESGセレクト・リーダーズ指数

2022 CONSTITUENT MSCI 日本株  
女性活躍指数 (WIN)

「S&P/JPX カーボン・エフィシエント指数」の構成銘柄にも選定

⇒ **GPIF が採用する日本株の 5つの ESG 指数すべての構成銘柄に選定**

アナリスト・機関投資家向け 事業説明会（予定）

➤ **ライフサイエンス事業 9月16日（金）**

➤ **フィルム事業 9月29日（木）**

後日、当社ホームページ「株主・投資家情報」にて、説明資料を掲載予定



本資料中の見通しや目標等、将来に関する記載事項は、本資料作成時点において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績等は、今後の種々の要因によって、本資料の記載事項と異なる場合がありますことをご了承ください。

東洋紡株式会社

All Rights Reserved

**TOYOBO**  
Beyond Horizons

© TOYOBO CO., LTD. All rights reserved.